



## 第120号

高取 淳  
KCCN 副理事長  
京都府生協連専務理事

### コロナ禍後の大学生の暮らし

以前にもご紹介しました、「学生生活実態調査」が全国大学生協連により実施されました。この調査は大学生の生活や意識、行動を明らかにし、大学での生活をより充実したものにするために1963年から行われており、今回の調査は新型コロナウイルスが感染症法上で5類に移行してから初めての調査となりました。調査は今回が59回目です。

前回ご紹介した「学生生活実態調査」は2020年の秋に実施され、まさにコロナ禍による行動制限によって、私たちすべての日常が大きく変化したときのものでした。その時の調査では、コロナ禍の影響で、経済面や学生生活への失望感から大学を退学や休学する学生が急増するなど、多くの学生が悩みを抱えていました。

そんな中、今回の調査は2023年秋に実施されました。前回の調査時期との関係では、当時1年生だった学生は4年生になっています。調査では、大学生生活の現状や学生の意識、悩みなどが報告されています。回答者数は全国9,873人、構成は自宅生46.4%、下宿生が53.6%。

「学生の経済状況」調査では下宿生の仕送り額の減少が続いており、仕送り0円も7.5%ありました。何らかの奨学金を受給しているのは28.9%と、3割近くの学生が利用しており、奨学金の内訳は、貸与型17.1%、給付型6.9%、両方からが2.7%、不明2.2%。貸与型を利用している学生からは、将来の返済に関して不安を感じているという感想が寄せられています。一方で、新型コロナウイルスの感染症が5類に移行した以降の行動では、アルバイトや合宿、旅行が増加し元気な様子も伺えます。

「大学生活」については、やはりコロナ禍による変化が多数見受けられます。コロナ禍により非対面（オンライン）授業があたり前になったことで、現在では「対面・非対面」の両方の授業形態が定着しましたが、同じ日に対面と非対面の授業が混在することから、動き方に苦労しているという声が多数聞かれます。キャンパスの滞在時間は、コロナ禍前よりも短く、コロナ禍でサークル活動や友人と過ごす時間を持てなかったことが影響しているようです。中には、4年生になったが友人が一人もいないという学生も。ChatGPT（文書生成系AI）の利用に関しては、様々なメリットやデメリットが指摘されていますが、大学生の利用実態を見ると「利用経験のある学生」は46.7%で、継続して使っている学生は3割ほどでした。利用目的の多くは「論文・レポートの作成の参考」「翻訳・外国語作文」となっていますが、「相談・雑談相手」が利用目的の11%あることに少し驚きも感じます。

(次のページへ続く)

「学生の意識」調査では、学生生活が「充実している」との回答は90.2%と、コロナ禍収束後、充実度は確実に高まりました。入学年がコロナ禍初年度となった4年生も88.2%まで回復（1年生時は56.5%）し、元気を取り戻してきた様子が伺えます。大学生活の重点では「勉強・研究」、次いで「部活・サークル」と「よき友人・人間関係」となっています。社会的な課題である、SDGsへの関心は低下傾向にあり、「17の目標」に対し関心のあるものは「ない」という回答が増加しました。

「大学生活でのトラブル」では、入学後、何らかのトラブルに遭遇した学生はアンケート回答者9,873人中2,100人で21.2%の学生がトラブルを経験しています。中でも「訪問販売・キャッチセールス」「マルチ商法」「SNS上での金銭トラブル」等の消費者トラブルに遭遇したのは、9,873人中461人（4.7%）で、そのうちの297人は下宿生でした。知識や経験の少ない若者をターゲットにした悪質商法の増加が懸念されることから、社会や学校での学習や啓発の機会を増やすことが求められています。

全国大学生協連による「学生生活実態調査」の詳細は下記全国大学生活協同組合連合会のwebをご参照ください。

<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>

(2024年5月)